基督教用語「天主」について
—その成立についての考察—

陳　　贇

はじめに

本稿は、基督教（カトリック）用語「天主」の成立過程考察の一環として行うものである。また、ここに論じる「天主」は、基督教布教の極初期、即ち大航海時代に使用されたものを対象とする。

外国語、特に漢字文化圏以外の国から新しい言葉を採り入れる際、その言葉の意味または発音に従って、意訳あるいは音訳が施されるが、基督教用語のDeusの訳語「天主」もその中の一つである。

ところが、この訳語「天主」の成立については、基督教の根幹に関わる重要な語でありながら、未だ日中両国において互いに対立する見方、即ち、音訳日本語説、音訳中国語説、意訳日本語説、意訳中国語説が併行しているのが現状である。

本稿では、これまで公にされた語源説のうち、音訳語説に対する批判的検討を行い、これらを否定するとともに、Deusが意訳語として成立したものである可能性を論じたい。

1　「天主」の音訳日本語説

中国において最も広く利用されている外来語辞典の一つである劉正埮他編『漢語外来詞詞典』（1984年）には、「天主」について次のように記載されている。

○天主　tiān zhǔ 基督教称耶和華為上帝或天主. 源日　天主tenshu〖<古代漢語《史記・封禅書》:‘八神：一曰天主，祀天斎．天斎淵水，居臨菑南郊山下者.’　六
音訳拉丁語Deus〗

これによれば、「天主」は『史記』に典拠を持つ古代漢語に由来することばであるものの、基督教用語としては日本語より借用（＝「源日」）したもので、ラテン語Deus

の音訳語ということになる。

一方、沈国威(1993)はこれを、「『漢語外来詞詞典』の誤認と断定することができる」(p.158)とし、「天主」は「中国で考案された訳語の一つである」(同上)としている。その根拠として、「羅明堅(ルッジェリMichele Ruggieri)の『天主聖教実録』(1584年広州刻本)をはじめ、書名に「天主」という語がついたものだけでも、数十種類にのぼる」(同pp.158-159)という事実や、

○西洋地方称呼天地万物之主闘斯二字、此二字在中国用不成話、所以在中国之西洋人、並入天主教之人方用天主二字、已経日久。従今以後、総不許用天字、亦不許用上帝字眼、只称呼天地万物之主。〈西洋では、天地万物の主をデウス[闘斯という字を当てた]と呼ぶ。しかし、この二字は、中国語では意味をなさない。従って中国在住の西洋人、および中国の入信者たちは、長く「天主」という語を使ってきた。今後は「天」という字を使ってはならず、また「上帝」という語もいけない。ただ天地万物の主と呼ぶべし。〉(『康熙与羅馬使節関係文書』14通・故宮博物院編影印本) *引用・日本語訳とも沈(1993)による。

という1704年のローマ教皇クレメンス11世の教令を示し、「ローマ教会が「天」ではなく、あくまでも「天主」－天地万物の主であるのにこだわったことが分かる」(p.159)と述べている。事実「天主」は、たとえば、鐘鳴旦(Nicolas Standaert)他編『耶蘇会羅馬档案館 明清天主教文献1～12』(台北利氏学社2002)所収の諸文献等を参照しても明らかなように、明清時代のカトリック関係の文献において、Deusを意味する最も一般的且つ権威的な語として使用されているのである。

では、なぜ、『漢語外来詞詞典』に示されるような「天主は日本における音訳語」という見方が存在しているのであろうか。この問題を解決するには、まず、日本語における「天主」という語の扱いについて確認しておかねばならない。

2　日本の辞典類における記載

日本の辞典類(国語辞典・漢和辞典)においては、次の【表1】に示すように、古くから「天主」音訳語説が示されている。

九七　【表1】

大槻文彦『言海』1891	でうすノ音訳字
山田美妙『日本大辞書』1893	でうすノ音訳

金沢庄三郎『辞林』1907	「デウス」の音訳
郁文舎編輯所『辞海』1907	デウスの音訳
芳賀矢一改修『日本大辞典言泉』1927	でうすの音訳
松井簡治『大日本国語辞典』1916～1920	でーうすを・天主と唱ふるは、洋語を漢音に訳せり
大槻文彦『大言海』1934	でうすノ音訳字

このような音訳説は、現在行われている日本の国語辞典・漢和辞典等にも受け継がれており、次のような記載が認められる。

【表２】

『新明解国語辞典』初版1972～５版1997	デウスの音訳
『新明解国語辞典』初版1972～５版2005	デウスの音訳[*1]
『日本国語大辞典』初版1975	ラテンDeusを漢語に音訳したものという
『日本国語大辞典』２版2001	ラテン・ポルトガルDeusを漢語に音訳したものという
『角川古語大辞典』初版1995	ポルトガル語Deusの音訳
『新漢和辞典』初版1963～３訂版1997	ラテン語Deusの音訳
『広漢和辞典』初版1981	ラテン語Deusの音訳
『漢語林』初版1987～新版1993	ラテン語Deusの音訳
『大漢語林』初版1992	ラテン語Deusの音訳
『大修館現代漢和辞典』1996	ラテン語Deusの音訳
『大修館新漢語辞典』初版2001	ラテン語Deusの音訳
『新漢語林』初版2004	ラテン語Deusの音訳
『岩波漢語辞典』初版1987	Deusラテンの音訳
『岩波新漢語辞典』初版1994～２版2000	Deusラテンの音訳

一方、このほかの日本の辞典類に記載の語源説としては、

【表３】

『広辞苑』初版1955～５版1998	ラテン語Deusの漢訳という
『新潮国語辞典』初版1965～２版1995	ラDeusの漢訳語という
『新釈漢和辞典』新修版1975～新訂版1984	ラテン語Deusの漢訳（初版1969には無し）
『日本語大辞典』初版1989～２版1995	ラテン語デウスの漢訳

*1　第６版（2005）では「デウスの音訳か」と、断定を避ける表現となっている。

『大辞泉』初版1995	ラテンDeusの漢訳語という

のように「漢訳」とするものがあるほか、

【表４】

『新字源』初版1968～改訂版1994	キリスト教の神にマテオ＝リッチが付けた名
『大字源』初版1992	キリスト教の神にマテオ＝リッチが付けた名

のように、命名者を特定するものもある。その一方、

【表５】

『大辞典』初版1936	ラテン語Deusの訳語
『角川国語中辞典』初版 1972	Deusの訳語

のように「訳語」とだけ示すものもあり、辞書類記載の語源説は一定していないのが現状である。

３　音訳日本語説とその問題点

３．１　「天有主」→「天主」説への疑問

楳垣実(1963)は、日本におけるDeusの発音の変化・音訳字の変遷について、

○デウス－でうす、泥鳥(ママ)須 → でいうす、伝宇須、提宇須、提宇子、帝宇須 → ていうす、てうす、天有主、天主 → 天主教（p.53）

という過程を示し、

○「デウス」の例は、音声変化を起こした結果、音訳字が次第に意訳字に変わった例（同上）

としている。また同氏の別稿(1975)においても、

○天主というのもあて字の一種でラテン語のデウス(Deus)からきたといわれるが、天主とはなかなかうまくあてたもので、音訳兼ね備わっている。しかし、これに落ちつくまでには、デイウス・泥烏須・伝宇須・提宇須・天有主などと、いろいろ苦心を重ねたものだった。(p.77)

と述べて、「天主」は元来Deusの日本における音訳に基づくものという見方を示している。しかしながら、福島邦道(1977)が批判するように、ここには、「いかなる資

料に、いつごろ、どんな宛て字がなされたのか」(p.443) という例証がなされていない。

「音訳字が意訳字に変わる」というのは、次のような、矢口茂雄(1938)が「縁字」と呼ぶものと関わりの深い現象と考えられる。

○“襦袢”“羅紗”“精縷”“更紗”などの文字は本来写音のために選ばれたものであるが全く無意味なる当字でないことは一目して分明である．何らか内容と関係ある文字あるひはその事物の性質を暗示する文字を用ひてゐる．服飾織物の類なる故，糸篇衣篇の文字を選ぶことがこゝでは示されてゐる．これは漢字といふものが単純な表音文字とは異り，本来義字であるところから当然上の如き傾向を取るのであらう．古く天主教布教期に“天有主(デウス)”“安女(アンジョ)”などといふ音訳字が見られるがこれらもやはり同様の傾向のものである．‥以下略‥(矢口1938：p.49)

ここではその具体例の一つとして「天有主」の例が掲げられている。また楳垣は「天有主」→「天主」という変化を示唆しているが、これについても矢口が、

○表記法を考察するに当つて逸することのできない一特性がある．それは文字の省略あるひは脱落ともいふべきものである．“和蘭陀”→“和蘭”の変遷を見ればそれは直ちに了解されよう．陀字なくとも読みは同じである．(同上p.69)

と述べていることが参照されよう。楳垣が直接矢口の考え方に依拠したか否かは未詳であるが、上述のように考えれば、楳垣の説は一定の合理性を持つと見ることができそうである。

ところで、この「天有主」という表記は、上掲の矢口(1938)において「天主教布教期」に見られるとするほか、楳垣自身も「漢字書きの外来語」として、

○天有主（デウス）〔Port. deus〕(楳垣1932；p.107)

のように掲げ、また遡って、

○デウス　ディウス　天有主　天主　提字子 等（上帝、神）　葡Deus（デウス）（木下祥真『袖珍百科全書』1906年所収「往事伝来欧州其他の外国語：耶蘇教関係の諸語」p.380)

○Deusu†（天有主)，n．基督教ニテ，「神」ノ称．L.，Port. deus．☞「伝字須」，「提字須」，「泥字須」等トモ書シ，後「天主」トナセリ．（上田万年他『日本外来語辞典』1916年）＊「†」は「今日用ヰラレザル語」(凡例)。

のような辞書類の項目に示された例もあるが、何れの場合もその出典が示されておらず、「天主」との前後関係は詳かでない。なお、台湾の神父で歴史学者でもある方

豪がその著書『方豪六十自定稿』下册（台湾学生書局1969）において、後掲する『天帝考』（1660年）の注釈を行った際、

○‥前略‥可見「天主」二字実為「Deus」之訳義兼訳音、旧作「陡斯」、亦作「天有主」。（『方豪六十自定稿』下册p.2277）

と述べ、「天主」がDeusの意訳と音訳とを兼ねた語であることを示すとともに、「天有主」の存在を記している。しかし、日本側の資料と同様に、「天有主」の出典については触れておらず、同書上册「清代禁抑天主教所受日本之影響」（pp.147-171）の諸篇においても、日本人の著作や論文を参考にした部分がしばしば見られることから、或いは、この「天有主」の例も、日本側文献の影響によるものかも知れない。

ところで、「天有主」という表記は、管見の限りにおいては、次に掲げる伊達政宗の書翰に見る例が早いものである。岡田正之「伊達政宗西班牙王に贈りし書」（『史学雑誌』二1890.1）によって示せば次のごとくである。

○此伴天連より貴キ天有主天道之御法聴聞仕候、一段聞入大切ニ雖レ存、難レ去指合之事御座候間、未無二其義一候、（慶長十八(1613)年九月四日付、スペイン王ドン・フィリップ宛伊達政宗書翰）

○貴き天有主之御宗門ニ、於二吾等国一下々罷成候義少もさまたけ申間敷候間、さんふらんしすこの御門派之伴天連衆御渡可レ被レ下候御馳走可レ申事、（同「申合条々」）

ただし、このような「天有主」の例は、キリシタン資料をはじめとする他の文献に見出すことは困難である。なお、岡田氏は上掲第１例に注を付して、「「デウス」ノ音訳字ナリ 真神ヲ指ス」と述べており、矢口、楳垣等の説もあるいはこの記述を根拠とするものであったのかも知れない。

ところが、このような「天有主」の例よりも「天主」は凡そ三十数年も早く、ポルトガル・エヴォラ図書館蔵の『屏風文書』[*1]（1581年成立）に、

○天主ノ御前ニハ如何ニモ不足ナルコト多ク ‥中略‥ 殆天主ニ仕へ奉ルヘキ人ノアタル自由ノ心ノ本ニセラル （土井忠生1982；pp.34-35による）

という二例を見ることができる。また、『サントスの御作業』（1591年）には、

○Vonajiqu mata midaidokoro mo Deus uo fucaqu vosore vyamai tatematçuri, banji tomoni tenxuno gofôcô no michi ni isamaruru. （Ⅱ, p.88, l.4）〈同じく

九三

*1 この屏風はローマ法王に寄贈するために作られたものであり、天正少年使節団は天正10年（1582）正月に長崎から離日しているので、屏風は1581年中に完成されていたと推定される。なお、正文に示している「天主」についての二例は、海老沢有道(1963,pp.72-73)にも見られ、これが『日本のカテキズモ』（1581-1582年の成立と推定される）第二部の「入満心得ノ事」と判断される旨が記されている。

又御台所もデウスを深くおそれ敬ひ奉り，万事共に天主の御奉公の道に勇まるる.〉＊下線筆者。漢字仮名交じり文への翻字は福島(1979)による。

のように、Deusとtenxuが併用された例を認めることができる。このtenxuが「天主」という表記（漢字語）に相当することは、『羅葡日対訳辞書』(1595年)および『日葡辞書』(1603年)の、

○Deus, i, Lus. Deos Iap. Tentŏ, tenxu, tenson, tentei. (『羅葡日対訳辞書』p.206)

○Tenxu. Tenno nuxi. Senhor do ceo. Palaura dos liuros da igreja.〈天の主．イゲレジヤ（教会）の書物用語.〉(『日葡辞書』p.254) ＊日本語訳は『邦訳日葡辞書』による

のような記述－「tentŏ（天道)」「tenson（天尊)」「tentei（天帝)」との並列、及び“Tenno nuxi（天の主)”という逐字的解釈－によっても明らかである。

このような状況から判断すれば、「天有主」が「天主」に先行するものとはみなし難いと思われる。すなわち、

○或ハ天主ハ元来天有主と書くべきものなるを例の省字流にて有字を省きしゆゑ音訳の痕跡を失ひたるなりと云ふ説も立てられ難きに非ざれども、是ハ鑿説なるべし」(坪井1894)

と述べられているように、「天有主」から「天主」が生じたというのは附会の説で、むしろ「天主」を音訳語のように解釈した結果、三音節の「デウス」という語に対応する一字一音の表音的漢字表記を実現しようとして、「有」字が付加されたのではないかと考えられる。

３．２　使用者の意識

一方、キリシタン伝来期の日本における「天主」使用者の意識は、むしろこの語の音訳語説に否定的な内容となるものである。

当時の文献では、これまでに無い新概念を紹介したり、外国語を説明する場合、音訳または意訳、あるいは音訳と意訳を並列させることが行われるのが一般的である。これはキリシタン教理書についても同様で、例えば『ドチリナ・キリシタン』などに頻出するDeusやSt.Mariaを示す語は、「御主でうす」「御母サンタマリヤ」のような〈意訳＋音訳〉、または〈音訳＋意訳〉を組み合わせた形で用いられている。これらの場合、音訳外来語の意味理解の補助として意訳語が添えられたものと判断される。

このことを踏まえつつ江戸初期の文献を見ると、

○天主泥烏須作天地世界。…（『対治邪執論』慶安元（1648）年）

○是天主泥烏須作天地万物、且又救世人太因縁法。…（同上）

のような、「天主」と音訳語「泥烏須（デウス）」という組み合わせが看取される。仮に「天主」を音訳と認識しているのならば、さらに同じく音訳の「泥烏須」と並列させる必要はなかったと考えられ、むしろ「天主」は意訳語と認識されていたと見られるのである。

4　日本における音訳中国語説の発端

「天主」が中国における音訳語であるという考えは、古く新井白石の『西洋紀聞』(1708年)に見ることができる。やや長くなるが以下に引用する。

○按ずるに、西人其法を説く所、荒誕浅陋、弁ずるにも足らず。しかりといへども、其甚だしきもの丶ごときは、また弁ぜざることを得べからず。まづ、其番語称じて、デウスといふもの、漢に翻して天主（テンチウ）とす。これ彼レ此レ声音相近きにとれる事、たとへば、エイズス訳して、耶蘇（セース）とするがごとし。番字もと読むべからず。漢字を仮りて、其声音をうつせるのみ。其義番語にありて、漢字にあるにはあらず。しかるに明季の諸儒、利瑪竇初に天主の字を借り用ひて、その番語を訳し、つゐに其説を附会して、経にいはゆる上帝これ也とす。諸儒其説にまどひて、其非を覚（サト）らず。‥後略‥（『西洋紀聞』下）

ここでは、当時中国で行われていた「天主」という語が、漢字の音を借りてデウス(Deus)の音訳中国語として造語されたものであること、その訳者は利瑪竇（マテオ＝リッチ）であるが、彼がこれを「上帝」の意味に附会して説いたため、他の宣教師たちが意訳語と信じたことが記されている。

この『西洋紀聞』の説はその後日本において広く受け入れられ、先に示した辞書類の語源説も、多くはこの『西洋紀聞』の記載に基づくものと見られる。

5　中国における音訳中国語説：紐摂説

九

実際、中国においても、ごく僅かではありながら、「天主」は音訳語であるとの主張も見られる。例えば福建漳州の中国人信者厳謨の著した『天帝考』（前出『天主教東傳文献』所収）に、

○然天地万物之主宰、多字難以名呼、無奈紐攝。‥中略‥故依太西之号、紐攝称天主。

（『天帝考』1660年前後成立；バチカン教廷図書館所蔵『天主教東傳文献』一所収）

という記載がある。古代中国語学においては、「紐」は頭子音のことで、「摂」は韻尾のことである（『古漢語知識詳解辞典』中華書局1996年p.275,342参照）。この文章の趣旨は「「天地万物之主宰」という呼び方は文字数が多くて呼びにくいため、やむを得ず太西（＝泰西すなわちヨーロッパ）の発音に従って、「天主」と音訳した次第である」というもので、「天主」を音訳語と見ている。ただし、当時の中国人による天主教関連論述の大部分を収めるこの『天主教東傳文献』の中で、「天主」を音訳と主張する記述はこの例以外に見られない。

そして、16世紀末葉の中国、及びフィリピンをはじめとする東南アジアの華僑圏において行われたDeus音訳の実態は、次節に示すように、「天主」の音訳説を否定する内容のものなのである。

5．1　音訳中国語の実態

中国における大航海時代の耶蘇会士による中国本土の布教は、日本に遅れること33年の1582年からである。この年、中国布教史上最も重要な人物とされるイタリア人の耶蘇会士マテオ＝リッチが中国広東省肇慶に到来し、布教活動を始めた。徐宗澤神父は「中国聖教掌故拾零」（『中国天主教傳教史概論』民国叢書第二編十一巻所収〈土山湾印書館1938年版影印本〉）において次のように述べている。

○博学利瑪竇司‥中略‥訳Deus為陡斯、Gretia為額辣済亜、等等、此等訳音辨法起初皆然、直到教士深知文字之意義、能分辨明白而方改的。〈マテオ＝リッチがキリスト教経典を訳すにあたり、はじめはDeusを「陡斯」、Gretiaを「額辣済亜」などとしたが、このような音訳の方法は最初の段階においてはみんな同じである。このような状態は宣教師たちが文字の意味を深く理解し、よく弁えられるまで続いていた。〉（pp.356-357）＊〈　〉内日本語訳は筆者

ここに見られるDeusの音訳語「陡斯」は、日本の江戸時代における排耶書（林羅山『排耶蘇』*1 1606年）にも登場するものであるが、このほかにも中国では様々な音訳語が行われていた。先に掲げた1704年のローマ教皇クレメンス11世による教令にあ

*1　「徒斯画像」（林羅山『排耶蘇』1606年）、「沈着く耶蘇も陟斯もころぶなり 才丸」（其角『誰が家』三1690年）のような、日本の文献に見られる「徒斯」および「陟斯」は、この「陡斯」を誤った形と見られる。なお『大言海』は、上記『排耶蘇』の例を採用して「徒斯トモ書ス」としている。

る「闍斯」も広く知られるものであるが、管見では以下のような音訳語の例が認められる。

○天廷之中、真有一位為天地万物之主。吾天竺国人称之謂了無私是也。〈天廷には、まさしく一人の天地万物の主がおられる。吾天竺国の人は、この方を「了無私」と称している。〉(ルッジェリ『新編天主実録』1584年pp.11-12) ＊〈　〉内日本語訳は筆者。

このほかフィリピンの福建系華僑の間で使用されていたと思われる「僚氏」や「寮氏」(方豪前掲書、下pp1506-1513) など[*1]もあり、中国語におけるDeusの音訳語は数多く存在していたのである。このように音訳語が多数存在し、「天主」とともに使用されていること自体が「天主」の音訳語説を否定する最大の根拠となりうるように思われる。

実際、宣教師たちは、キリスト教本来の面目を保つと同時に、中国の民衆にも受容されやすくする工夫をし、「意味をなさない音訳語＋意味を有する意訳語」という組み合わせによって、その目的を達成しようとしていたようである。それは、初期の天主教東伝文献を見ればよく分かる。「陡斯、天主」の例のほか、「罷德肋、父」「費略、子」「斯彼利多三多、霊神」などの並列も頻繁に使用されていた。

また実際の発音を見ても、Deusの発音と、当時の宣教師たちが接したと思われる「天主」の中国語音すなわち広東音〔t'ín chü〕、福建音〔t'ien chù〕、寧波音〔t'ín chü / t'ien chù〕、および北京音〔t'ien chù〕との対照を試みても[*2]両者の発音の乖離は大きく、類音と捉えることは困難であり、「天主」が中国語におけるDeusの音訳語であるとは判断しにくい。これについては早く、

○天主(チェンツー)と陡斯(トウチ)とは明清の字音に於て全く其音を異にせり、されば天主も陡斯も同語の音訳なりとは謂ひ難く、天主実義の説明より見るも天主の二字は義釈が如し。(坪井1894)

という指摘があり、「音訳」説は取るに足りないと強く批判されている。

従って、音訳中国語説はごく一部では存在していたとしても、それは根拠の希薄

---

*1　「了無私」「僚氏」「寮氏」は、頭子音〔d〕－〔l〕の音韻交代が生じた例と見られる。

*2　発音表記は、衛三畏『英華韻府歴階』(Wiliams, S. W. : An English and Chinese Vocabulary in the Court Dialect. Macao, 1844)に拠った。そのほかにも、市川慎一〔『デウスDeusは「神」ではない－来日前のザビエルと訳語の「大日」採用をめぐって』(早稲田大学語学教育研究所紀要59;2004.3) に引用されているJulliard, Rene : Les Jesuites en chine (1552-1773) / La Querelle des rites presentee par Etiemble., 1966(pp.88-89)所載の内容によると、天はTien[T'ien]、天主はTien-Tchou[T'ien-tchou]となっている。なお、リッチ自身は「天主」の発音を次のように示している。
天 tien 主 chu (『西字奇蹟』1606年)

な説であったと言うべきであろう。

6　宣教師の記述：意訳説の示唆

「天主」が音訳、意訳の何れであるかについてもっとも権威を持つべきものは、当時実際布教に当たった宣教師たち及びその周辺の記述であることには間違いないが、紙幅の都合上、一部だけ取り上げることにする。

6．1　中国における宣教師の記述

中国においては、前掲『天主聖教実録』（1584年刊）において、

○天庭之中、真有一位天地万物之主。

と述べ、「天主」は「天地万物之主」を意味するものという見解が示されている。また利瑪竇（マテオ＝リッチ）は、その著『天主実義』（1595年刊）において次のように述べている。

○人誰不仰目観天、観天之際、誰不黙自嘆、曰斯其中必有主之者哉。夫即天主、吾西国所稱陡斯是也。〈人たれか目を仰けて天を観ざらんや。天を観るの際、たれか黙してみづから嘆じ、これその中にかならずこれを、主（つかさど）る者ありと曰はざらんや。それすなはち天主にして、吾が西国の陡斯（デウス）と称するところのものこれなり。〉＊〈　〉内日本語訳は後藤基巳1971による

また、同じく利瑪竇の『布教史』においても

○チーナ語には神（ディーオ）という名前に相当する名前が一つもなく、しかもこのdに当たる文字がないためにディーオという発音ができず、神をティエンチュ（天主）と呼ぶようになった。それは「天の主」という意味だが、いまチーナのどこへ行っても、『キリスト教の教養』〔天主教要〕や他の書物においても、神はこの名前で呼ばれるようになっている‥下略‥」（利瑪竇『中国キリスト布教史』：大航海叢書日本語訳本p.176）

と記し、「天主」は「天の主」という意味を持つ意訳語であると説明している。利瑪竇と親交を持ち、氏の布教に大いに寄与した人物とされる中国人信者徐光啓も、

○造物主者、西国所称陡斯、此中訳為天主。〈造物主は、西洋で言うところの陡斯であろう。ここでは、天主と訳す。〉（徐光啓『造物主垂象略説』〈『天主教東伝文献三編』所収2-547〉冒頭）＊〈　〉内日本語訳は筆者

との記述がある。そのほかにも、時代はやや下るが、康熙帝の時利類思（Ludovicus Buglio）神父著作の『不得已辨』（1645年〈『天主教東伝文献』所収1-225〉）には、

○「耶穌譯言救世，乃天主降生之尊稱，天主二字亦中華有之，吾西國稱陡斯也。其義則曰：『生天、生地、生萬物之大主宰，簡其文曰天主』。〈要約：「耶蘇」を訳して「救世主」とす。即ち天主降臨の尊称なり。天主二字、また中華に是を有す。われ西国では「陡斯」と称す。その義即『天、地、万物を創る大主宰なり。その文を略して「天主」と謂ふ。』〉＊〈　〉内要約筆者

とあり、このような「簡其文曰天主」といった文言は『天主教東伝文献』に多々見られる。すなわち、Deusが意味するところの「天地万物の主」という文を省略した結果、「天主」と称するようになったとみているのである。

6．2　日本における宣教師の記述

一方、日本側においては、中国の「天の主」という解釈に相当する「天之御主」という表現が1582年以前にすでに存在していた（1582年天正遣欧使節の和訳旧約聖書：ポーランド・クラクフ市ヤギェウオ大所蔵[*1]を参照）。つまり、中国において利瑪竇が示したものと同様の解釈が、日本において一足早く行われていたということである。

それだけでなく、「天主」意訳説を傍証する例は、日本で布教活動を行った宣教師の記述にも認められる。例えば、先に掲げた『日葡辞書』に「天主」＝「天の主」という解釈がなされていることや、コリャード『日本文典』（1632年）に、

○シナ語から借用した漢語（cobita「媚びた」又はcoie「声」という）の実名詞が二つ結合すると、その一つが形容詞となることがある。例.ten（天）とxu（主）からのtèn xu（天主）は「天の主」または「諸天の主」となる。（原文p.11；日本語訳風間書房刊大塚高信訳本（1957年）pp.13-14による）

のように記されていることから、「天主」を意訳語と見ていることが明白である。

以上述べてきた通り、「天主」はこれをDeusの音訳語と見なす証拠に乏しく、「天地万物の主」ないし「天之御主」の意味を二字漢語で表そうとした結果考案されたもの、すなわち意訳語と判断すべきものと考えられるのである。

---

*1　本用例は、遠藤邦基「外国人の手による日本語研究」（2004年度関西大学大学院文学研究科講義資料）より引用した。

7　意訳語「天主」の出自について

前節において「天主」を意訳語と考えるべきだという結論を導き出したものの、この意訳が日本と中国のいずれにおいてなされたものかについては、次に示すような問題点があり、判断が難しいところである。

まず、マテオ＝リッチ『中国キリスト教布教史』には、次のような記述がある。

○最初のときに神父たち（マテオ・リッチとルッジェリを指す＊筆者）が滞在したティエンニン〔天寧〕寺の近くに、姓をチン、名をニコーという利発な若者が住んでいた。‥中略‥後述の「天主」という文字の発案者であるこの人の漢名は残念であるが知られていない。かれは1584年11月21日に受洗し、洗礼名をジョヴァンニと呼んだ。天主という文字は日本キリシタンでも使用することになる大発明であった。（大航海時代叢書による：p169）＊下線筆者

また、方豪「利瑪竇年譜」（『方豪六十自定稿』所収）によれば、

○七、八月間（五月十二日至七月十五日）拉丁文Deus、義太利文Dio（真神）首次由一「望教者」訳為「天主」。（1583年の項）

とあり、「天主」の初出は1583年であったことが示されている。このほか、蕭若瑟の『天主教傳行中国考』（民国叢書1-11，上海書店1989：p.112）や『中国天主教史籍彙編』（輔仁大学出版社2003：p.73）などにおいても、「ルッジェリ神父が1583年、肇慶に中国初の天主堂「僊花寺」を建て、そこに耶蘇の像と垂れ幕が飾ってあり、その上に「天主」との二文字が書いてあった。「天主」と称するのはこれが初めである」（訳文筆者）という内容の記述がなされている。もっとも、このような記載がいかなる資料に依拠したものであるのかは示されておらず、これが事実であるか否かについても未詳である。しかしながらリッチの記述は、「天主」が中国で成立し、日本に伝わったことを示唆するものである。

一方、海老沢有道（1963）は『日本のカテキズモ』（1581-1582年成立）について、

○日華キリスト教布教史上、早くから問題になっている「天主」という呼称についての新資料である上に、その後の日華の教理書編纂にヴァリニャーノのカテキズモ及び本書（＝エヴォラ写本筆者注）が、何らかの意味で参考させられたと思われる。（『エヴォラ屏風文書の研究』p.58）

と述べ、「天主」の出自は同書によるものという可能性を示唆している[1]。実際、前掲『エヴォラ屏風文書』（1581年）所収の「日本のカテキズモ」に次のような例が存在し、これが現在のところDeusの訳語「天主」の管見初出例である。

○天主ノ御前ニハ如何ニモ不足ナルコト多ク‥中略‥殆天主ニ仕ヘ奉ルヘキ人ノアタル自由ノ心ノ本ニセラル（土井1982；pp.34-35による）

この「天主」の例は、先に掲げたリッチ等の言う1583年より僅か二年ながら遡る例ということになり、そうすると、日本において成立した「天主」が中国語へもたらされたという可能性も考えられるのである。

なお、イエズス会の日本巡察師ヴァリニャーノは1579年から1582年初めまでの間日本に滞在し、その間中国で布教していた宣教師ともかかわりを持っていたことからすれば、この時期に一方の国において工夫された訳語が、短時間で他方の国の宣教師に伝わることも十分あり得ることと考えられる。Deusの訳語「天主」の初出時期が日中両国で近接しているのは、あるいはそのような当時の状況を反映するものなのかも知れない。ただし日本における「天主」は、その初出こそ若干早いものの、中国での大量使用に比べると用例自体が極めて希少で、どの程度一般的な用語であったのかについては未詳である。

以上のように、日中における「天主」の使用開始時期は近接しており、この語が両国の何れにおいて成立したのかについてにわかに判断することは難しいのである。

おわりに

以上述べ来たったところをまとめると、以下のようになる。

①日本の辞書に見られるDeusの訳語の「天主」は、音訳日本語の「天有主」に由来するという見方は根拠に乏しいものである。

②一部の辞書に見られる、「天主」は音訳中国語に由来するものという説明も成立しがたいものである。

③「天主」は日本の音訳語でも、中国の音訳語でもなく、意訳語と見なすべきであるが、日本と中国のどちらにおいて先に意訳が施されたのかは未詳である。

なお、本稿では紙数の都合上、Deusと「天主」の神学概念はどこまで一致しているか、また「天主」及びその代わりに使用されていた「天道」、「天帝」、「天尊」「天」

八五

*1　海老沢はまた、「日本に布教したコンタンツオC. Costanzoが一六一八年十二月の総会長宛書簡に「シナのパアデレ衆がなしたように、Tienchu即ち天の主、あるいは我々が日本で始めはなしたように天主の名称を採ることに多くの不都合がある。」とあることからして、デウスに天主を当てることは実は日本に始まり、後にその誤謬が知られるものであることは疑いない。」（同書p.73）と述べ、天主の出自は日本にあると見るべきと力説している。

（日本において）と「上帝」、「天」（中国において）の実際の使用状況はどのようなものであったか、さらに、「原語政策」（日本における）と「訳語政策」（中国における）[*1]が神学用語の普及に与える影響などについて、十分に述べることができなかったことを付言しておく。この点については別の機会に詳述したい。

【引用参照文献】

○石井久雄「和語・漢語のはざまで－キリスト教と性の外来語－」『英米外来語の世界』南雲堂1981.10

○井手勝美『キリシタン思想史研究序説』ぺりかん社1995.2

○井手勝美「デウス＝神の概念25「大日」「天道」「天主」「提宇子」」『日本史小百科〈キリシタン〉』東京堂出版1999.9

○楳垣実「漢字書きの外来語１（A－O）」（『外来語研究』１名著普及会1932.10）

○楳垣実『日本外来語の研究』研究社1963.7

○楳垣実『外来語』講談社文庫　講談社1975.7

○海老沢有道「キリシタン宗門の伝来」『キリシタン書　排耶書』〈日本思想大系25〉岩波書店1970.10

○海老沢有道他『キリシタン文学双書』キリシタン教理書』キリシタン研究第30輯　教文館1993.11

○海老沢有道・松田毅一『エヴォラ屏風文書の研究』ナツメ社1963.11

○大槻文彦「外来語原考（二）」『学芸志林』81；1884.4

○大野晋『一語の辞典　神』三省堂1997.10

○大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』関西大学東西学術研究所1967

○尾原悟『キリシタン文学双書』イエズス会日本コレジョの講義要綱Ⅲ（1593-1595年間）』教文館2001.12

○尾原悟『キリシタン文学双書』サントスの御作業』キリシタン研究第33輯；教文館1996.11

○近藤政美『コンムテンムツス・ムンヂ総索引』勉誠社1980.5

○佐伯好郎『支那基督教の研究３』春秋社松柏館1944.8

○沈国威『近代日中語彙交流史』笠間書院1994.3

○チースリク，フーベルト「キリシタン書とその思想」『キリシタン書　排邪書』〈日本思想大系25〉　岩波書店1970.10

*1「原語主義」および「訳語主義」という用語は、井手(1995、1999)に拠った。

○坪井九馬三「天主なる名称の出処に就て」『史学雑誌』5-5　史学会1894.2
○土井忠生「日本耶蘇会の用語について」『外来語研究』3　名著普及会1933.7
○土井忠生「十六・七世紀における日本イエズス会布教上の教会用語の問題」(『キリシタン研究』15；1974.11）→土井忠夫『吉利支丹論攷』三省堂1982.4に再録
○土井忠生『吉利支丹語学の研究』靖文社1933.8
○富永牧太「ヴァリニャーノ「日本伝道のカテキズモ」の書誌」『ビブリア』34；1966.10）→家入敏光編『日本のカテキズモ』天理図書館1969.11、富永牧太『きりしたん版文字攷』1988.4に再録
○豊島正之『キリシタン版ぎやどぺかどる　本文・索引』清文堂1987.2
○平川祐弘『マテオ・リッチ伝（1)』東洋文庫141　1969
○福島邦道「極初期キリシタンにおける原語と訳語の一問題」(『松村明教授還暦記念国語学と国語史』明治書院1977.12
○福島邦道『サントスの御作業翻字研究篇』勉誠社1979.2
○『藤原惺窩・林羅山』日本思想大系28岩波書店1975.9
○マテオ・リッチ著・柴田篤訳注『天主実義』東洋文庫728.平凡社2004.7
○矢口茂雄「明治以前に於ける外来語の音訳」『外来語研究』4－2；1938.1
○山本澄子『中国キリスト教史研究』近代中国研究委員会1972.12
○柳父章『ゴッドと上帝』筑摩書房1986.3
○蕭若瑟『天主教傳行中国考』－『明清間耶蘇会士訳著提要』徐宗沢編著（民国叢書1-11）上海書店1990.12
○孫尚揚『明末天主教與儒教的交流和衝突』文津出版社1992.2
○鐘鳴旦〔他〕『徐家匯蔵書楼明清天主教文献』1-5　方済出版社1996.12
○『中国天主教史籍彙編』輔仁大学出版社2003.7
○徳礼賢『中国天主教傳教史』台湾商務印書館1970
○穆啓蒙著、侯景文訳『中國天主教史』台湾光啓出版社1980
○方豪『方豪六十自定稿』（上・下・補編）台湾学生書局1969.12
○方豪『中国天主教史人物傳』（上・中・下）台湾中華書局1988.3
○李志剛『基督教早期在華傳教史』台湾商務印書館1985.6
○陳垣『康熙與羅馬使節関係文書』近代中国史料叢刊続輯69-70沈雲龍主編　文海出版社.1974
○朱維錚主編『利瑪竇中文著訳集』復旦大学2001.12

（ちん　いん／本学大学院生）